

MAMIYA CAMERA-PHOTO LIFE SUPPORT



マミヤカメラクラブ

マミヤカメラクラブはマミヤカメラをご愛用の方ならどなたでもご入会いただける写真クラブです。マミヤカメラクラブ会報誌 (Mamiya Gallery) の発行 (原則年2回)。プロ写真家による撮影会・勉強会・セミナーの開催。webギャラリーで会員の作品展示。マミヤ製品修理・点検料金の割引等と会員特典もたくさんあります。マミヤカメラに関する情報、会員相互の親睦と写真技術向上をめざし、素晴らしい写真の世界をご堪能ください。



入会費用

入会金 1000円 (税込)
年会費 3000円 (税込) ご入会日より1年間。
※但し2年分の年会費をご入会時にお納めください。

特典

- マミヤカメラクラブ会報 (Mamiya Gallery) の発行。
- クラブ撮影会の開催。
- 勉強会・セミナーの開催。
- ホームページ上に会員作品ギャラリーの開設。
- マミヤ製品修理・点検料金の割引。
- 会員証、オリジナル会員バッジ提供。
- オリジナル会員名刺制作 (有料)。

●製品・修理に関するお問い合わせは、サービス受付へご相談ください。

- 修理をはじめオーバーホール、清掃等を承ります。
- 操作上の疑問にもお答えしています。

Phase One Japan 株式会社

物流センター内サービス受付

〒385-0052 長野県佐久市原 547

TEL.0267-62-8036 FAX.0267-62-8137

営業時間 9:00~17:50 土、日、祝日は休業



マミヤカメラクラブ事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-39-14 ワイズビル 株式会社ワイズクリエイイト内

TEL.03-5689-2776 FAX.03-5689-2786

E-mail :info@mamiya-club.com

- マミヤカメラクラブの入会お申込み等お気軽にお問い合わせください。
- 撮影会・イベントのお申込み・お問い合わせを承ります。
- 下記、ホームページでも詳しくお知らせ致しております。是非ご覧ください。

マミヤカメラクラブホームページ <http://www.mamiya-club.com/>

●株式会社ワイズクリエイイトでは、下記のような業務を行っています。

- フェーズワン製品・大中判カメラ販売を致しています。
- 撮影アクセサリ、ザックの販売を致しています。
- プロラボ現像・プリントを承ります。
- 撮影会・ワークショップ・セミナーを開催しています。

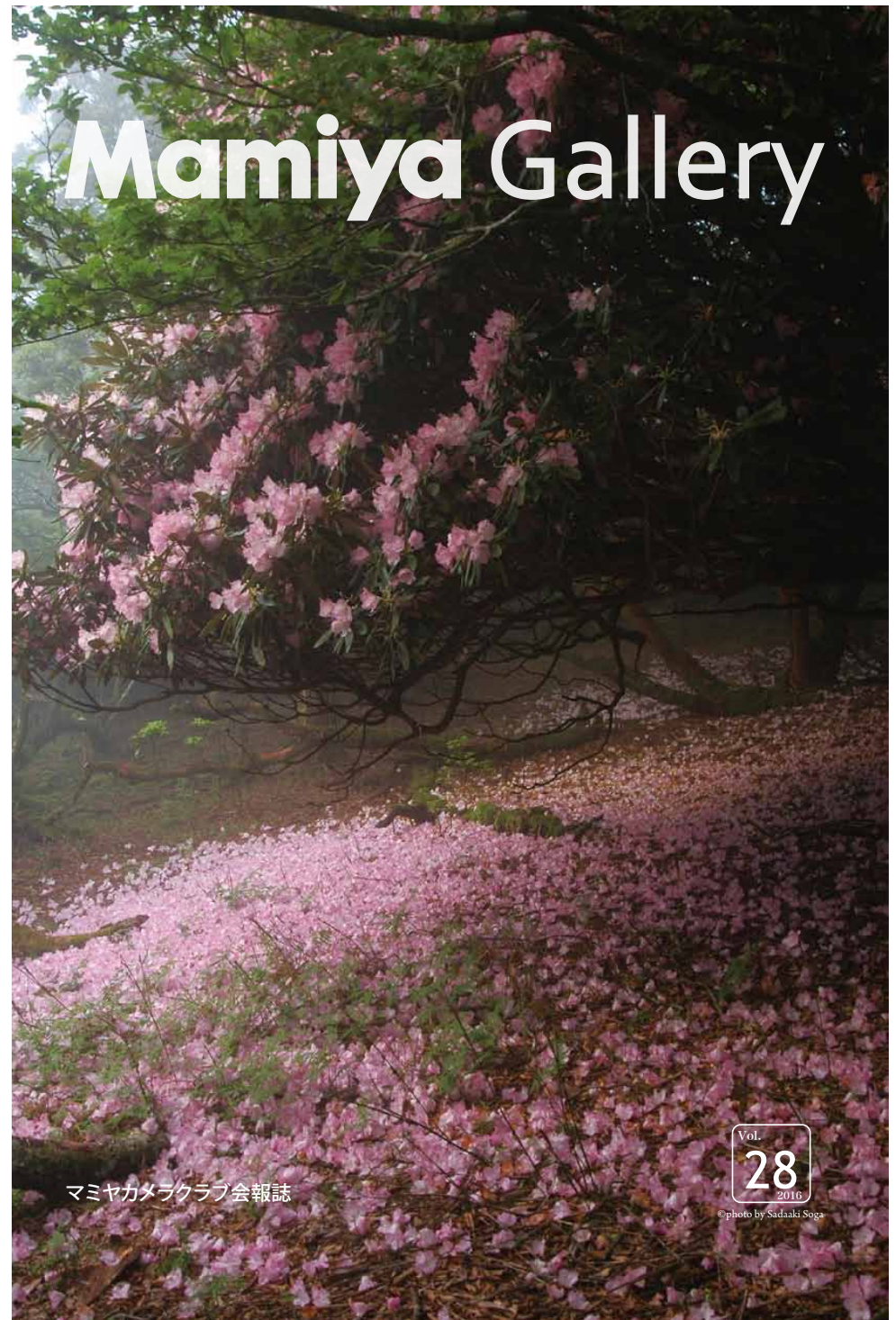
ワイズクリエイイトは写真を通じて人と人、人と自然とのコミュニケーションを確立する事を目的とするフォトオフィスです。

大中判カメラ専門ショップを展開、自然写真家、山岳写真家による写真セミナー、撮影会の開催、写真集の出版、写真レンタル、各種制作業務等、写真に関するソフトとハードあらゆる業務を行います。

www.yscreate.co.jp



Mamiya Gallery



マミヤカメラクラブ会報誌

Vol.
28
2016

©photo by Sadaaki Soga

伊豆・天城を愛する 写真家・曾我定昭さんに聞く。

若い頃から富士スピードウェイの公式カメラマンであり、大判カメラを駆使して商品撮影をされ、さらに風景写真の分野では写真集を何冊も出版し、企業カレンダーにも作品が多く採用されている曾我定昭さん。お会いする度に「私はプロの写真家ではありません。プロの写真家は全ての撮影に於いて80点以上の作品を撮影出来なければなりません」と謙遜されます。ただ「伊豆・天城に関してはプロカメラマンです」と言う、ちょっと不思議な写真家に今回はスポットを当て、写真との出会いから写真家としての経験、そしてこよなく愛する伊豆・天城についてインタビューをしました。(木戸)



「奇形樹」天城山には奇形の木が多い。深い霧の中、至福の時を過ごした。マミヤ7II 43ミリ

写真との出会いは——

20代前半に自動車写真に興味を持ち、モーターマガジン社が発行する自動車雑誌の年度賞を目標にコンテストに応募していました。当時の仕事が自動車ボディの設計でしたので、仕事にかこつけて500mmレンズを持って鈴鹿第一回グランプリレースを取材しました。また、会員が40名限定という日本レース写真協会(JRPA)にも所属していました。何かをやるうと思うと本気になる性格なので、その時の夢は「日本のレースカメラマンになる」事でした。他のカメラマンはヘアピンカーブの写真など雑誌や新聞に掲載される様な派手な写真を撮影する方が多かったのですが、私は「タ

曾我 定昭 (そが だてあき)

1940年5月、フィリピン・ミンダナオ島ダバオ市生まれ。20歳の頃、出版社から依頼され国内サーキットで自動車レースの撮影取材をする。JRPA(日本自動車レース写真家協会)会員、富士スピードウェイのオフィシャルカメラマンになる。2004、2007年マミヤOPのカレンダー、フィリップモリスジャパンの2009年カレンダーに作品採用、2000年からは自身でも天城山のカレンダーを制作。アウトドア用品のフォックスファイアーのフィールドアドバイザー、日本風景写真協会会員(2011年から理事)。神奈川県小田原市在住。著書「天城山」「天城」「幽幻」など。



「天城山」 2000年11月発行 150ページ 出版=アドミックス
「天城」 2002年11月発行 107ページ 出版=アドミックス
「幽 玄」 2006年09月発行 111ページ 出版=神奈川新聞社



イヤの焼ける匂い」や「エンジン音の聞こえる」緊張感あふれる写真を撮影してやると、視点が変わっていたようです。その様な写真を撮影していて、富士スピードウェイからのお声が掛かり、ただ一人の専属カメラマンになりました。

大判カメラとの出会い——

知り合いの商業・工業デザイン関連の会社に就職し、初めて4x5インチの大判カメラに出会いました。写真撮影を任されたのですが、「デザイン会社なのだから大判カメラを使ってアオリ撮影をしなければならない」と上司を説得し、会社から額面の書いていない小切手をもらい、銀座にあったプロ機材販売店で「大判カメラを一揃い欲しい」と購入したが、リンホフカラーボディと90mm、150mm、210mmレンズ、ジッツオ三脚などでした。応対した店員が「初めて大判カメラを撮影するのですか?」と、いろいろアドバイスしてくれたのを覚えています。また、会社に入りの広告写真家からアオリの基本から撮影までを1週間程教わり、トランジスタラジオなどの広告写真を撮影していました。

その後、自動車レースの写真からも離れ、小田原の印刷会社に転職し、そこでも写真撮影に携わりました。印刷会社で使っていたのは中判カメラでしたが、クライアントを安心させる意味でも、腕は勿論だけ外観も大事と、スイス・ジナー社の大判ビューカメラのフルセットとリンホフテヒニカを導入し、写真撮影を2~3年していました。

撮影はカタログやチラシの商品撮影が多くてあまり面白くなかったのですが、会社から「デザイン会社を作れ」との命令があり代々木に3000万円のマンションを購入し、デザイン事務所を立ち上げました。確か38歳の時でした。しかし、事務所は立ち上げたものの仕事がないんですね。仕方なく当時全盛のダイエーに営業に行き、いろいろ提案したところ、その後は希望する仕事量とお金をもらえるようになりました。

風景写真との出会い——

50歳の頃に事務所が銀座に移転しました。その頃の銀座は写真ギャラリーも多く、いろいろな写真展で沢山の作品を見る機会が増えました。そんな時ですが、阪急デパートで或る写真団体の風景写真展を見ました。今まで自動車写真や商品写真を経験していましたが、初めて見る風景写真に衝撃を受けたのです。聞いたところそれらの写真は大判・中判カメラで撮影された写真という事でした。勿論その団体に入会したとは言うまでもありません。



『黎明の稜線』 夜明け前のブナ林は天城山らしい深い静けさに沈んでいた。 マミヤ7II 50ミリ

風景写真に思う事——

素晴らしいと思った風景写真の団体に入ってしまったらしくして気付いたことは、会員が指導講師に合わせた写真撮影をしていることでした。構図はもちろんピントも露出も良い素晴らしい作品なのですが個性が無いように感じました。素晴らしい写真を見る事は大変良いことだと思います。私も事務所が銀座に移転してからは毎日のように写真ギャラリー巡りをしていました。すると頭の中にイメージが残りますが、その後「私ならばこの様にして写す」と思う事が大事だと思っています。

写真家の石橋睦美さんと親交がありますが「森林美」という写真集を傍らに置いて、何時でも見られるようにしていた事がありました。何かはっと気付いた時ページを捲って参考にしていました。

伊豆・天城について——

58 才で風景写真に目覚め、60 才で写真集を作る事を目標にしました。写真集を作るにはテーマが必要となります。私の場合、神奈川県の小田原に住んでいますが、近くには風景写真に適した箱根や伊豆があります。自分は伊豆をターゲットにしました。それも天城の森をテーマに選びました。正直なところ、その時は名前は知っていましたが、どの木がブナの木かも知りませんでした。そこでいろいろな事を調べたり、聞いたり勉強しました。春・夏・秋・冬の四季の天城の森を映像表現することが必要でした。一年半で何と 43 日間も天城の山に入りました。この取材で出来たのが 2000 年に発行した写真集「天城山」でした。

しかし、何回もこの写真集を見ていると、こうすれば良かった等の不満が鬱積し「もう一回、天城で写真集を作ろう」と決意しました。この時、取材のフットワークも大事との思いからマミヤ 7II を購入し作品を撮り貯め、2 年後の 2002 年に当時銀座に在った富士フォトサロンでの個展を開催して同時に写真集「天城」を出版しました。

その半年後にまた、「これでいいのかな〜？」と言う疑問が湧き出て「天城をもう一回撮ってやる!」と一大決意し、4 年がかりの 2006 年に第二回目となる富士フォトサロンでの個展と同時に写真集「幽幻」を発行しました。この撮影時には、伊豆半島の三角点を全て踏破したという人と知り合い、ご協力を頂きました。



『幽幻』 このシーンに出逢わせてくれた精霊に感謝したい。私の作品はこのカットなしには語れない。 マミヤ7II 80ミリ

写真集「幽幻」のシャクナゲが落ちる表紙写真について——

この「幽幻」の表紙になっているシャクナゲの落花写真をご覧になった著名な写真家に、一緒に連れて行って欲しいと言われる事があり、これに応じて何度かお連れしています。しかし、この表紙の写真は 2 度と撮れないと言う自負もあのです。それはある時数本のシャクナゲの木を見つけたことから始まります。普通シャクナゲは 5 月中頃から徐々に開花するのですが、この年は強烈な寒波のため開花が遅れ 5 月末に一気に満開となったのです。昼間の強い風と雨が夕方おさまりました。寝床に入ってから「今、あの満開のシャクナゲの花はどうなっているかな?」と想像し、イメージすると眠ることも出来ずに 30 分後には天城に向かって自動車のハンドルを握っていました。そして、暗い天城の山を登って早朝撮影したのが表紙の写真です。満開のシャクナゲが、一気に落花しイメージ通りの写真が撮影出来たのです。因みに次年度以降は一気の開花も落花もありません。写真は如何にイメージを予測するかが大事だと思います。



左上:『幽春』 天城最古の森の樹は優しげに揺れている。深海に漂う海草をイメージした。 マミヤ7II 50ミリ
 左下:『幽寂』 音もなく降り注ぐ雨がアセビの巨木を濡らす。その存在感は圧倒的だ。 マミヤ7II 80ミリ
 右上:『静雨』 枯れて立ち往生したブナを慰めるようにシダが雨に濡れて美しい。 マミヤ7II 80ミリ
 右下:『豪雨の後』 集中豪雨で荒れ狂う瀬流。水障りで私とカメラはズブ濡れになった。 マミヤ7II 50ミリ

プロ写真家について——

プロ写真家とはどんな写真でも 80 点以上の写真が撮影出来ることだと思っています。私の場合は伊豆・天城エリアに関しては負けない自信がありますが、他の場所ではプロ写真家と言われるほどの写真が撮影出来ると思っていません。北海道の美瑛で撮影しても前田真三さんのイメージで撮ってしまいますね。何処へ行っても自分の写真が撮れるのがプロだと思います。真似て撮影しても意味ありません。私は、写真を追求するには広い範囲より狭い範囲を何度も取材して作品を作っていくべきだと思っています。しかし、気分転換や心身のリセットが必要になった時には東北地方に撮影に出掛ける事もありますよ。

今後の夢と計画は——

私は風景写真を必ずしもキレイに撮影しようとは思っていません。天城の写真等は人によって怖いとかおどろおどろしいと言います。それでも私の風景写真を撮影して行きたいと思っています。本年 3 月には大阪の富士フィルムフォトサロンで個展を開催しましたが、その後、可能ならば静岡県の美術館でも個展開催の計画を持っています。また、今後撮影したい場所は静岡県の「愛鷹山（あしたかやま）」です。何と言っても名前が良いですね。でも、もう無理ですね。本当はあと 20 年若かったらと思いますが、出来ない理由を 10 個言うより、出来る理由を 1 個見つけて頑張りたいと思います。



『朝の一時』 黒雲に覆われた暗い夜が明けた。一時天城の森は狂ったような朝焼けに包まれた。 マミヤ7II 80ミリ

クラブ会員へのメッセージは——

目の前の情景に何を感じたか、自分のイメージを持つことが大切です。人の真似をして幾ら良い写真を撮影しても意味がないと思います。自分のテーマを決めて追求し的確なレンズ、構図、絞り、シャッター速度設定は勿論のこと、被写体に何を感じたか、「タイトル」を付けて考えるのも上達の秘訣かもしれませんね。



撮影講師を務めたマミヤカメラクラブ主催の伊豆・天城撮影会。(2012年11月)



《天城の写真展とカレンダー》

これまで富士フィルムフォトサロン東京で 2002 年 2006 年、2007 年に同サロン名古屋で写真展を開催し、本年 3 月には同サロン大阪で「幽彩天城山」を開催致しました。その他に、2015 年 1 月にリコーイメージングスクエア新宿（ペンタックスフォーラム）で「幽彩天城の森」を開催致しました。「天城」のカレンダーは毎年発行していますが、2016 年はカレンダー「幽彩天城の森」が静岡県の河津桜観光交流館、河津町内の観光施設、旅館で販売されています。また、忘れてならないのが 2004 年と 2007 年のマミヤカレンダーを担当し「伊豆・天城」の魅力を多くの方々へ発信致しました。（写真は 3 月 4 日～10 日に富士フィルムフォトサロン大阪で開催された「幽彩天城山」のスナップ）



拘りを持って
マミヤ中判カメラと
リンホフ大判カメラで撮影する
「森」と「大樹」。

カメラと出会ったのは、現職のころ山が好きで何回か登るうちに写真に残したくなりカメラを持ち始めました。最初はベーパー、やがてペンタックスの一眼レフカメラ。それに飽き足らなくなり、ペンタックスの中判カメラに手を出し、それで県展に入選したのが病み付きになりました。撮影は山の写真だけでなく、他にもいろいろ撮りましたが、退職後にある講師にテーマを絞りたいと指導されましたが、その意味が理解できなくワイズで撮影会に参加し、そこで指導された講師の方々の作品の中からやっとテーマが見えてきました。それが「森」と「大樹」です。それで年齢の近い写真仲間3人で「森」をテーマにして写真展を2回開きました。

マミヤカメラユーザーを訪ねて。

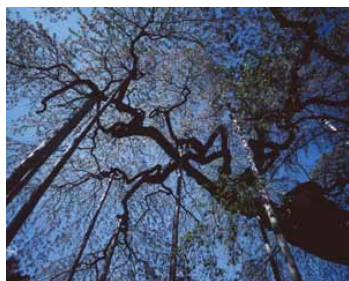
アマ写真家3人
平均年齢は82歳
まで自然テーマ写真展

米澤章 (よねざわ あきら)
1930年5月生まれ。埼玉県さいたま市在住。「森」と「大樹」撮影をライフワークとして、大判、中判のフィルムカメラを駆使して作品を残している。マミヤカメラクラブ会員、日本リンホフクラブ会員、ワイズ大判写真の会員。2006年、ギャラリーアートグラフにて「三人展 森は語る」開催。2012年、富士フィルムフォトサロンにて「三人展 森は語る」を開催し、平均年齢82歳の三人展として各種マスコミでもとり上げられる。写真はマミヤ7-2とリンホフで撮影する米澤章さん(右上、右下)。富士フィルムフォトサロン開催の写真展のスナップ(中2枚)と写真展を紹介した新聞記事(左)。

始めは自然が綺麗に撮れればそれだけで満足していましたが、やがて市展、や県展に出品し入選したり、地域のコンテストに入賞などすると、より優れた作品を求め大判カメラに手を出しました。シャープで解像力のある大判は70代の私の写真生活を充実させてくれました。70代の終わりに大病に罹り大判が持てなくなりマミヤ7-2を求めました。始めは、ピント合わせで失敗することが多かったのですが、ピントが合う様になると驚くほどシャープに撮れました。現在持っているレンズは50ミリと210ミリです。軽いし露出も合わせやすいので満足しています。これからは、自分の体力を考え自動車で行ける範囲で、やっぱり大好きな「森」や「大樹」を撮っていきたいと思っています



吉野梅郷



埼玉県・北本市



戸隠高原



日光・丸沼



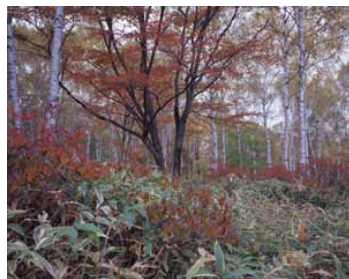
尾瀬ヶ原



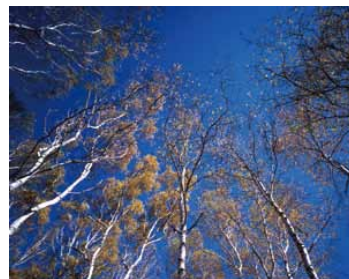
八幡平



木曽赤沢



八千穂高原



八千穂高原



奥羽根

マミヤの技術を引き継ぐ フェーズワン ジャパン社・福澤 強志さんに聞く。



昨年末に驚きのニュースが飛び込んできました。それは12月3日よりマミヤ・デジタル・イメージング株式会社の光学事業をデジタルカメラバックの世界のトップメーカーでもある、デンマークのPhase One社が資産買収を行い継承すると言うものでした。そして日本ではフェーズワンジャパン株式会社(以下フェーズワン社)が発足し、日本のマーケティングを担当すると言います。このニュースはマミヤカメラユーザーにとっても重要な出来事でもあります。詳しい内容を前マミヤデジタルイメージング社のスタッフでもあり現フェーズワンジャパン社マーケティング部マネージャー 福澤強志氏にインタビューを敢行しました。

(木戸)

福澤 強志 (ふくざわ つよし)
1965年東京生まれ。
フェーズワン ジャパン株式会社マーケティング部マネージャー(前マミヤ・デジタル・イメージング社マーケティング本部海外営業課長) 中判デジタルバックの黎明期よりデジタルバック販売・開発等に携わる。趣味はギター。

フェーズワン社とマミヤ社の関係は?

Phase One社はデンマークを本社としてニューヨーク、ロンドン、ケルン、香港、上海、シドニー、テルアビブに支社を持つ世界的な中判デジタルバックメーカーです。

2009年にマミヤ・デジタル・イメージング社(以後はマミヤ社)の株を保有して以降、フェーズワンとマミヤの開発チームが協働し、カメラ、レンズ設計、生産プロセス、改善などを進めAFDIIIから645DF、DF+へとダブルネームでリリースしてきました。世界初の645一眼レフカメラをリリースし、中判カメラ、レンズ市場で技術力を培ったマミヤ社と世界最高峰の品質、トップシェアを誇るデジタルバックを統合することで、Phase One社が描くデジタルイメージングソリューションをフォトグラフィアの皆様にお届けしたいという思いが実現することになります。

これからは、技術の最先端を行くフェーズワンと76年の歴史を持つマミヤが一つになり総合カメラメーカーとして、さらなるユーザー対応の充実を推進していきたいと考えております。

マミヤ社のスタッフや工場は?

ご安心ください。旧マミヤ社のスタッフは営業職・事務職並びに工場従業員も含めて全員がフェーズワン社員になりました。勿論、長野県佐久市に在るマミヤ社の工場もそのままフェーズワン工場となるだけです。これによりデンマークのPhase One 本社でデジタルバックを製造し、佐久工場では引き続きカメラボディ、レンズ、アクセサリの製造を行う事になります。ただマミヤユーザーには残念な事ですが、東京サービスセンターが佐久物流センター内サービス受付に移ります。東京事務所はフェーズワンショールームとして生まれ変わりました。

マミヤフィルムカメラのアフターサービスについて?

前述のように神田錦町の東京サービスセンターは無くなりましたが、長野県佐久市のフェーズワンジャパン佐久物流センター内のサービス受付で修理受付・問い合わせ業務を承ります。修理等のある方はこちらに持ち込まれるか宅急便等でお送りください。従来のマミヤカメラクラブ会員の修理割引サービスは継続していますので、会員証のコピーか会員番号等を明記の上お申し込みください。

フェーズワンジャパン株式会社 物流センター内サービス受付
〒385-0052 長野県佐久市原547 TEL 0267-62-8036 FAX 0267-62-8137

フェーズワンジャパン株式会社
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町3丁目18 1F
TEL 03-5577-6861
FAX 03-3219-0050
【ホームページ】
<http://phaseone.com>



長野県佐久市にある物流センター内のマミヤサービス受付。専任の担当者がご出迎えてくれます。



神田錦町に在るフェーズワンジャパンショールームの外観。白に青字のPhase Oneロゴと、嬉しいかな赤字のMAMIYAタテロゴ。ショーウィンドウにはフェーズワン製品が並びます。

フェーズワン日本の取扱製品は?

フェーズワンブランド並びにマミヤ・リーフ・ブランドのデジタルバック、カメラシステム、レンズ、キャプチャーワンソフト、更にはスイスのアルパカメラ等になります。

フェーズワンジャパンショールームについて?

ショールームではフェーズワン製品の展示は勿論のこと、世界のプロカメラマンから定評の現像ソフト「キャプチャーワン」の体験も可能です。また毎月開催のフェーズワンセミナーにもご注目ください。詳細はフェーズワンブログでご確認ください。

<http://phaseone.seesaa.net/>



入り口に煌然と輝くPHASE ONEロゴ。

マミヤカメラクラブ会員へのメッセージは?

フィルムにはフィルムの楽しさがありますし、デジタルはデジタルの楽しさがあります。これらは一見相反するように見えますが、実は表裏一体でどちらも楽しい、特にフィルムの現像プロセスはなかなか個人ではコントロールできませんが、デジタルでは可能です。自分の好みにあったフィルムカーブ(トーンカーブ)を作ることも容易です。

いずれにしても、フィルムとデジタルの両方で「写真を楽しむ」ことができればさらに充実した写真ライフになるのではないのでしょうか。是非デジタルにもチャレンジしていただきたいと思います。ショールームでお待ちしています。



キャプチャーワンソフトでその場で撮影データを現像できます。



マミヤビル1階エントランス。



正面ウィンドウを中から見た光景。ボディ、レンズ、デジタルバックを展示。



落ち着いた商談スペース。後方にはデジタル用ストロボもあります。



これが噂の一億画素XF100MPシステムカメラ! ショールームで体感できます。(右)各種イベント等が紹介されているフェーズワンブログ。 <http://phaseone.seesaa.net/>



江戸、昭和の 歴史の記憶を辿る 墨田区・向島界隈カメラ散歩。

【撮影地・カメラ散策会紹介】

隅田川の東岸に位置する向島は、江戸時代から風光明媚の地として栄えてきましたが、明治期に料理屋が置かれそれが花街の起源となりました。最盛期には待合、料理屋が100軒から200軒、各検番（芸妓、料理屋を管轄する機関）芸妓は1000名以上あり各検番（芸妓、料理屋を管轄する機関）にそれぞれ在籍していました。近くには玉の井という私娼のいた飲み屋を装った非公認の遊廓が存在しました。現在は634mの高さを誇る東京スカイツリーの開業（平成25年5月22日）が記憶に新しいことと思います。カメラを持って、永井荷風の墨東綺譚の舞台となった東向島（玉ノ井）から隅田川をわたり浅草まで、昭和と現在の風景の交錯した下町風景を新たな歴史の記録として歩きます。



向島の名物

言問団子：「名にしおはばいざ言問はん都島我が思ふ人はありやなしや」と在原業平の和歌にちなみ名付けられた。長命寺様もち・隅田川上手の桜を塩漬けにした桜餅を考案、長命寺の門前で売られ始めた。（今は伊豆松崎産のオオシマザクラの葉。）



①東武鉄道伊勢崎線東向島駅(旧玉ノ井)。ここからスタートです。②③④すぐに東武博物館があります。鉄道ファンでなくても懐かしい車両の展示、SLショータイム、車両内部の木の床やつり革、椅子等見飽きることがありませんね。⑤水戸街道を渡り暫く歩くと向島百花園の入り口です。



⑥文化元年佐原鞠場によって造園。戦災で焼失し、昭和33年に現在の姿に回復し、昭和53年に国指定名勝及び史跡に指定。⑦園内は四季折々の山野草。花が自然に近い感じで楽しめるよう工夫されています。⑧昨年秋廃業してしまってお風呂屋さんは煙突の一部だけを残し解体されて更地状態。スーパー銭湯人気の陰でどんどん姿を消してゆく建物でもありますね。⑨白鬚神社。かつては白鬚の森と呼ばれる緑の美しい場所。向島八景、隅田川二十四景のひとつに数えられていました。江戸の風流人、文化人の詩碑、墓碑などが数多く残されています。⑩子育て地藏尊は今も昔も地域の人々に守られています。⑪地藏坂通り商店街。



⑪日本一のきびだんご、吉備子屋。⑫墨堤通り下辺りの昭和の建物。⑬鳩の街通り商店街とは…昭和3年から90年近くの歴史を持つ古い商店街です。東京大空襲を免れたために、通りの道幅は戦前そのまま、昭和初期からのレトロな商店と古い建物を改築した個性的な店もあり下町の隠れた人気スポットです。戦災を免れた建物です。提灯が何故か寂しげです。⑭露地の一角には井戸があります。



⑯⑰今も昔も庶民の味方？⑱路地をちょっと入ると災害時の井戸、防火用水などあり、住む人々の命と生活を守る心遣いが感じられます。⑲⑳粋な料亭がある見番通り。



㉑向島芸者さんには出会えませんが…墨堤組合は立派なビルの中。㉒弘福寺。㉓三冊神社。近江国三井寺の僧が巡礼中、荒れた祠の地中に収められた白狐にまたがる神像を得ると、何処からともなく白狐が現れ、神像の回りを三度回って消えたという故事に由来。㉔牛嶋神社。撫でると病が治るといふ心身回癒の「撫牛」。



㉕貞観年間頃、慈覚大師が一草庵で素盞之雄命の権現である老翁に会い、牛御前と呼ぶようになったと伝えらる。本所の総鎮守。これから挙式する花嫁、花婿さん人力車で登場です。本殿前に珍しい三輪鳥居があります。㉖隅田川公園。春は桜の名所、夏には隅田川花火大会が行われます。水戸徳川邸内の遺構を利用して造られた庭園です。㉗スカイツリーのある風景が日常となった向島。橋の上からの1枚です。㉘幕末・明治の英雄。勝海舟像。指さす方向は？㉙お疲れ様でした。解散場所の浅草に到着です。

編集後記 来る2020年の東京オリンピック開催も一因と思いますが、古い建物がいつの間にかマシオンになったり、道幅が広がったり東京都内は大きく変貌しています。事務局のある本郷界隈も、明治から下宿屋や庶民の憩いの場である共同浴場がいつの間にか無くなってしまいました。そんな変貌する東京を歩いて写真に残そうと「界隈シリーズ撮影会」を企画開催しています。「本郷」「谷根千」「向島」と続き今後も継続予定です。是非ホームページで確認の上ご参加ください。事務局 木戸嘉一

RAW 現像ソフトウェア Capture One Pro 9 Vol.3

フェーズワン ジャパン プロダクトマネージャー 下田 貴之

今回は春なので桜の写真を使用して作例を紹介したいと思います。

※Capture One Pro 9 が発表されましたので題名を変更して新機能もご紹介しています。

桜の花は淡いピンク色なので飛んでしまうことが多いと思います。飛んでしまっているところが多いと階調、質感が失われてしまいのっぺりした仕上がりになってしまいます。また、撮影時に全ての花を飛ばさずに撮影するのも難しいと思います。しかし、RAW データで撮影し Capture One Pro のハイダイナミックレンジを使用すればハイライトの階調を引き出すことができます。これからもデジタルカメラで撮影される方は、RAW データで撮影し Capture One Pro で調整してみてください。撮影時に調整しきれなかった階調を表現することが可能です。

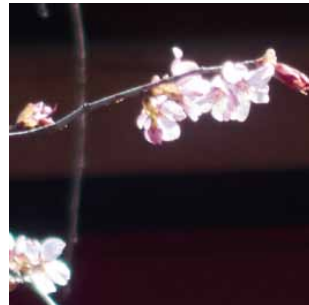


オリジナル

この撮影時も桜の花が少し白飛びしているため、ハイダイナミックレンジでハイライトの階調を調整し桜のディテールを出したいと思います。Capture One Pro のハイダイナミックレンジ / ハイライトのスライダーを上げハイライト部の階調を出します。従来の Capture One Pro にもハイダイナミックレンジは搭載されていましたが、Capture One Pro 9 で中間調に影響を与えずハイライト、シャドウのディテールを調整できるのでより自然な階調を表現することができるように進化しました。また、Capture One Pro のハイダイナミックレンジは無理にハイエストライトの階調を調整しないので、グレーになったり不自然な仕上がりになりません。



ハイダイナミックレンジ調整前



ハイダイナミックレンジ調整後

次に撮影時に落とされなかった背景の露出を落とし桜を強調します。しかし、この写真では赤い扉やシルバーの把手が残ってしまい不自然になってしまうので、部分調整を活用して馴染ませます。

部分調整で新規レイヤーを作成しブラシで扉を選択。彩度と明るさ機能で背景に馴染ませます。把手部

分は扉とは明るさが違うので別のレイヤーで調整します。

画面上部の枝と屋根は背景を暗く落としても残ってしまい、スッキリしないので部分調整のクローンレイヤーを使用して消します。背景を落としているので露出を落として目立たなくする方法もありますが、不自然に残ってしまう可能性があるためクローンレイヤーを使用します。一度露出を元に戻し画面上部を全体的にマクスシコピー元を選択します。細かい枝は1つずつクローンレイヤーを使用して消します。ブラシのボケを大きめに設定し枝よりも少し大きいブラシサイズで選択すると自然に消すことができます。クローンレイヤーを使用すれば RAW 現像の段階で、余計なものを消し劣化が最小限で自然に馴染ませることができます。



マスクでドアを選択

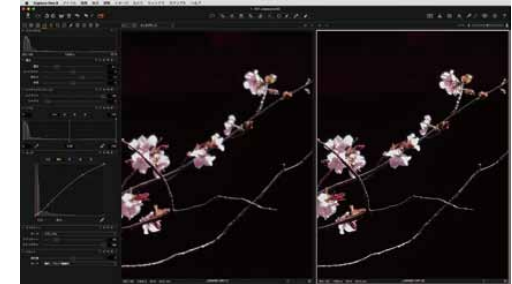


修正前



修正後

最後にクラリティーのクラリティー機能でトーンを柔らかくし、ストラクチャー機能でディテールを鮮明にします。



Capture One Pro 9 スクリーン



完成

そして、Capture One Pro 9 で新しく加わった輝度カーブで全体のコントラストと色温度を暖色系に調整し整えます。

昨年末より開催している界隈シリーズ撮影会 プロカメラマンが撮影したらこんな作品ができました。

昨年末から開催している界隈シリーズ撮影会が好評です。「東京に住んでいながら、こんな東京の一面があったなんて！」や「オリンピック前の東京を撮影できた！」など喜びの声が寄せられています。確かに歩く事は健康にも良いし、歴史を知ったり、新しいものを見つけたりと言う事ありません。更にカメラを片手に歩くとカメラ本来の目的でもある「記録性」を活かしたり、個々が持つ「芸術性」を磨くことにもなります。そんないいことづくめで手軽に参加できる界隈シリーズ撮影会ですが、果たしてこの撮影会で、どんな写真が撮影できたのかを検証したいと思います。本郷界隈～谷根千界隈～向島界隈と続いた撮影会に、ゲスト参加された写真家の石田研二先生の作品を誌上で紹介させていただきます。今後も界隈シリーズ撮影会は継続して行く予定ですので、作品をご覧頂き、一念奮起して頂けたらと思います。（界隈撮影会の予定はマミヤカメラクラブホームページで確認できます。）

石田 研二 (いしだ けんじ)
京都府出身。大阪芸術大学デザイン学科卒業。写真家の野町和嘉に師事。その後、フリーとなり個展他、グループ展に多数参加し活躍する。日本写真家協会会員、日本写真芸術専門学校講師、東洋美術学校講師。



写真は本郷界隈撮影会(左) 谷根千界隈撮影会(中) 向島界隈撮影会(右)のスナップ。



今は珍しい木造建物に興味を持ちました。下から見上げた状態で撮影する事で3階建ての高さを表現しました。残念なのは階段の手すりですが、これはどうしようもありませんね。セピア調にしたのは昔の雰囲気表現したかったからです。(本郷界隈)



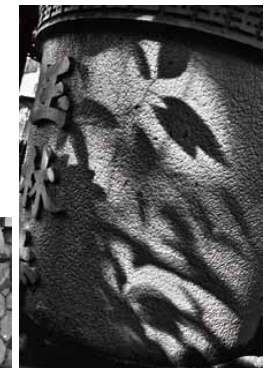
モノクロ写真にすることで、木造板塀とトタンのコントラストを対比させています。デジタルの場合被写体に応じてカラー、モノクロをセレクトできるのもひとつの魅力です。(本郷界隈)



谷中霊園の外れにある墓石やさんの裏側から木造の建物を撮りました。家と煙突の関係が古き良き時代を表現しています。(谷根千界隈)



昔ながらのレンガ造りの店の佇まいが気に入りました。次回は是非入店したい・・・。(向島界隈)



防火用水栓に日差しが刺し込み木の葉がシルエットで映っていました。カメラを多少斜めに構え構図を作りました。(谷根千界隈)



上のモノクロ写真の左側をカラー撮影しました。青色のドアと緑の植木、更には鉢植えの植物が絶妙のバランスで不思議な生活感を醸し出しています。(本郷界隈)



歩いていて丁度お腹が空いたときに出会ったカレーライスののぼりです。バックの猫カフェの小物との対比も面白いと思いました。(谷根千界隈)



鳩の街商店街の古民家カフェ。木の格子と鉄の扉の組み合わせがちょっと気になる入り口。(向島界隈)



何とも良い表情、雰囲気のお店主ご夫婦。ご主人はマミヤ6からのユーザーで大の写真好きでした。おいしいおそばでした。(向島界隈)



大判カメラ のすすめ その8

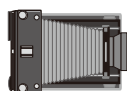
撮影はリンホフ MT2000ボディに C M フジノン 180mmF5.6を装着。期限の切れたクイックロードフィルムでしたが、何とか撮影スタートです。

今号で 8 回目になる「大判カメラのすすめ」は、スイングアオリを解説しようと事務局・ワイズクリエイティブのお膝元の東京大学構内に出かけてきました。被写体は東大病院・第 1 研究棟入り口の 6 本のアーチ型石柱です。斜めよりカメラを構え、絞り込んで撮影しても、石柱全部にピントを合わせるのには不可能です。これをスイングアオリを使って、全てにピントを合わせる撮影にチャレンジです。さて結果は・・・。

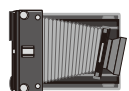
スイングアオリってどんな時に使うの？

近景の花、中景の木々、遠景の山々と全てにピントを合わせるとき使うアオリが、最も使用頻度の高いチルトアオリです。多くの大判カメラマンはこのパンフォーカス効果が得られるチルトアオリに関しては理解しているのですが、事スイングアオリに関しては「殆ど使わない」や「分からない」が多い様です。でもスイングアオリはそんなに難しいアオリではありません。チルトしたカメラをそのまま、左右に 90 度ずつ傾ければスイングアオリになってしまいます。下のイラストはカメラを上部から見てフロントとバックのスイングアオリを掛けたものですがチルトアオリと同じ動きをしているのが理解出来ると思います。そう、要するにチルトはレンズを上下に振るアオリに対して、レンズを左右に振るアオリなのです。

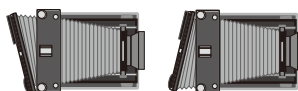
【アオリ無し】



【フロントスイングアオリ】



【バックスイングアオリ】



スイングアオリの被写体は？

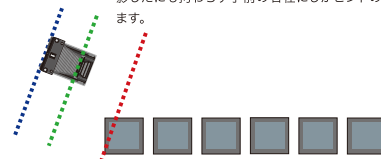
近景、中景、遠景全てにピントを合わせる場面は多いのですが、斜めになった被写体にピントを合わせる場面はあまり多くはないと思います。例えば石仏が横に並んでいるのを斜めから撮影する、杉並木のように並列に列んだ樹木を撮影するなどでしょうか？ただ、建築写真等ではこのスイングアオリを多用することは多いです。今回の被写体の様な支柱面や壁面全てにピントを合わせるのにはスイングアオリは必須となります。

スイングアオリの被写方法は？

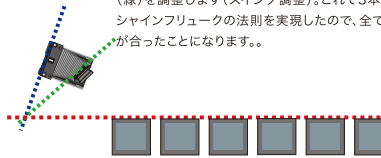
スイングアオリを使って全面にピントを合わせる場合でも、写そうと思う被写体の延長線とレンズ面からの延長線、フィルム面からの延長線が 1 点で交錯することにより、被写体全てにピントを合わせる事が可能になるシャインフリュクアオリを使用します。チルトアオリのタテ線がヨコ線に変わっただけです。理解し易いのではと思います。



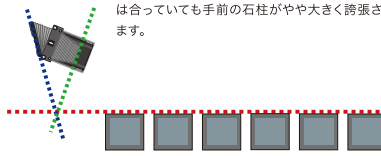
石柱 6 本全てをフレーミングできる場所にカメラをセットします。ピントガラスを覗きながら、一番手前の石柱にピントが合うようにしてシャッターを切りました。イラストでも分かるように、フィルム面の延長線(青)とレンズの延長線(緑)、ピントを合わせた線(赤)が平行位置関係になっています。もちろん F11 で撮影したにも拘わらず手前の石柱にしかピントの無いのが分かります。



次に、レンズ面を右に振り(スイングして)ピントを確認してシャッターを切ります。見事同じ F11 の絞りながら全ての石柱にピントが合っています。撮影者の意図で、ピントを合わせたい並列石柱の延長に赤い線を引きます。次に、この赤線がフィルム面の延長線(青)と交錯する点に合わせて、レンズ面の延長線(緑)を調整します(スイング調整)。これで 3 本の線が交錯してシャインフリュクの法則を実現したので、全ての石柱にピントが合ったことになります。



シャインフリュクの法則は、フィルム面、レンズ面、被写体面全ての延長線が交錯すればパンフォーカス写真になることですが、今回の撮影でも、フィルム面をイラストのようにスイングアオリすれば法則を実現できます。写真でも分かりますが、石柱全てにピントが合っています。ただ基本的にバックアオリ(バックスイング)は被写体の形を変えるときに使いますので、ピントは合っても手前の石柱がやや大きく誇張された写真になります。



それではアオリを使わないで、写したい被写体の手前 1/3 の位置にピントを合わせてシャッターを切ってみましょう。結果は、写真の様に、最も近い石柱の一部と後方の石柱に、ピントを合わせることが出来ませんでした。アオリ機構のないカメラでは、これがパンフォーカス写真を作る一般的な方法なのですが、更に絞り込まなければなりません。最小絞りで撮影すると、その分シャッター速度を遅くしなければならず、風に揺れる可能性がある被写体等では現実的ではありません。

